

第 40 回ズーム三水会報告

日時：2024 年 10 月 16 日（水）16 時～18 時

テーマ：ポパー哲学の素描的紹介** 三世界論を中心に **

講師：波治裕美様

司会：村沢澄子様

参加者（敬称略）村沢澄子 中村範子 野口幹夫 波治裕美 石塚秀雄

小関 栄 斎藤嘉璋 丸山茂樹 富沢賢治 丸山茂樹

報告内容と質疑応答：

20 世紀を代表する哲学者であるが、知られることが少ないカール・ライムント・ポパー
をその独特の三世界論を中心に紹介したい。

詳細は次ページのレジメと録画でご覧ください。

録画：https://youtu.be/FGiV_LAZJ-I

資料：添付 1 発表用レジメ

添付 2 参照ノート

2024 年 10 月 16 日

三水会 10 月例会 発表用レジメ

ポパー哲学の素描的紹介

＊ ＊ 三 世 界 論 を 中 心 に ＊ ＊

報告者 波 治 裕 美

1 カール・ライムント・ポパーの紹介

1) 1902 年、オーストリア・ウィーン生まれ。

1937 年、ナチス台頭とユダヤ人迫害を避けてニュージーランドに亡命。

クライストチャーチのカンタベリー大学に赴任。

1945 年、ニュージーランドからイギリスへ。まもなく国籍取得。

ロンドン大学で論理学・科学哲学科の教授に。

1994 年、イギリス・ロンドンで逝去 享年 92 歳。

2) 20 世紀を代表する哲学者であるが、知られることが少ない。哲学の諸領野に渡って、意表を突く問題や論点を提起し、鋭い論証や概念を提唱し、知的抵抗を招来させつつも持論を認めさせてきた知的探究者である。また解答にではなく、問題に関心を寄せるよう要請する。

3) 主要著書の紹介 すべて邦訳がある。

- ①『科学的発見の論理』 帰納法批判、境界設定、反証可能性、確率論
- ②『ヒストリシズムの貧困』 歴史法則主義批判、史的唯物論批判
- ③『開かれた社会とその敵』 全体主義批判、ソ連の政治経済社会批判
- ④『推測と反駁』 テーマ要約は「われわれは自己の過誤から学ぶ」
- ⑤『客観的知識』 進化論的認識論、三世界論、实在論
- ⑥『自我と脳』(エックルズとの共著) 心脳問題(心身問題)
- ⑦『ポストスクリプト』三部作 科学論、非決定論、客観的確率論。

1976年までの著作、論文数は126本を数える(自伝『果てしなき探求』)。その後の18年間の著作や講義録などを想定すると200本を優に超える。

4) 交友関係から ポパーに直接的な哲学の師といえる人はいない。

自伝を読むと世界に名だたる哲学者、思想家、科学者との直接的交友は百人を優に超え、驚くばかりである。もっとも政治家やマルクス主義学者、文学者、作家、宗教家の名は見当たらない。

- ① **アインシュタイン**への傾倒は終生。1950年の訪米時に3度訪問、その感想は、「最も大きな、最も持続的な衝撃を受けた」。意見の相違もあった。
- ② **論理学・数学者** アルフレッド・タルスキー(ポーランド) 真理論。リヒャルト・フォン・ミーゼス(ウィーン) 確率論。エイブラハム・ウォール

ト(ハンガリー) 確率統計学。クルト・ゲーデル(チェコ) 論理学。

③ 生物学・脳科学者 コンラート・ローレンツ(ウィーン) 生物生態学者、

ジョン・エックルズ(オーストラリア) 大脳生理学者。両人と親交を重ねる。

5) 批判と論争 『報告レジメ』、『参照ノート』における紹介には◎印。

ポパーは「論争の哲学者」として印象付けられている。それらを枚挙するなら相当数になるが、代表的なものの紹介に限る。

◎1. ウィーン学団 帰納論理学、有意味性の規準、

◎2. マルクス主義 歴史法則、全体的社会改造、政治思想

3. ウィットゲンシュタイン 「哲学問題」を巡って。火掻き棒

4. シュレーディンガー エントロピー論争、時間の矢と生命

◎5. フランクフルト学派(批判理論) 社会科学の実証主義論争

◎6. トーマス・クーン(科学革命論) パラダイム論争

7. ラカトシュやバートリー(門下生) 「反証可能性」論を巡って

8. コペンハーゲン学派(量子論と確率論) 「不確定原理」問題

2 哲学的立場あるいは哲学的信条

1) 批判的合理主義 ポパー自ら称した哲学的立場

「批判的討論によって合意に達する」という態度で、当時のウィーン学団の哲学「論理実

証主義」(論理分析・言語分析論)への対抗的立場のこと。

「批判的合理主義」という教理体系は存在しない。ポパー独特の表現では、『わたくしは間違っているのであって、あなたが正しいかもしれない。だから努力すれば、われわれは真理にもっと近づくかもしれない』という態度。

それは、以下の「試行錯誤」の思考と行為であるとする。

$$P_1 \rightarrow TT_1 \rightarrow EE_1 \rightarrow P_2 \rightarrow TT_2 \rightarrow EE_2 \rightarrow P_3$$

問題設定→暫定的仮説→誤りの排除→新たな問題設定→

論理実証主義(左の項)との理論的対比を項目的に示すと以下の通り。

帰納論理 → ← 演繹論理 帰納論理は論理学的に正当化されない

検証理論 → ← 反証理論(反証可能性の理論) (後述)

有意味性規準 → ← 境界設定規準 反形而上学でなく疑似科学区分

観察から理論へ → ← 理論から観察へ 理論は問題設定から

バケツ理論 → ← サーチライト理論 観察も問題設定から

2) ポパーの哲学的信条

(1) 無知の知、そして可謬主義

われわれの知識には限界がある。知っていることの少なさを自覚する。しかも誤りやすい。自らの誤謬を絶えず追求し真理を探し求める。

(2) 素朴実在論そして多元論

「外部存在」と呼ぶものの実在だけでなく、人間や動物の持つ苦しみの意味や人間の希望や善意が実在し意味を持つことを信じないのは道徳的に見て誤りである。タルスキの真理論に拠る(命題は事実に合致すると真)。

(3) 論理的理性主義あるいは客観的理性主義

合理性の基礎は理性を信ずることにある。またそれは理性の限界もわきまえているということである。啓蒙主義を信じ、啓蒙主義に期待する。

(4) 生命体は問題解決体である。生命体は能動的に問題に向かう。

生物の進化も人間知識の進化も問題(設定)から始まる。その解決のために試行錯誤を続ける。解決しても新たな問題が生じ、さらなる解決を試みる。『アメーバからアインシュタインまでほんの一步である。』

3 ポパーの創発による哲学的キーワードの若干の紹介

1) 反証可能性 言明や理論が偽(否定・反駁)とされる可能性のこと。

理論は検証(実証や論証)によって正当化されるという検証理論にポパーは異を唱える。そして「反証論(反証可能性)」を提唱した。普遍命題は単称命題のどんな累積によっても論理的に正当化されないが、たった一つの単称命題によって否定される。形式論理学における対当推理の「矛盾対当」に基づく。それを科学理論の境界規準にすべきと主張する。ポパー科学論のコアである。

また、形而上学の有意味性論争や帰納法問題、確率論問題へとつながる。

ポパーの科学論紹介は今回のテーマとしないので、この辺まで。

2) ヒストリシズム 「歴史法則主義」あるいは「歴史摂理主義」の意。

社会の歴史はその進歩や発展を貫く必然的法則性があるに違いない。それを発見し、大規模長期予測を行うのが社会科学の目的であるとする考え。科学の任務は未来予測性にあるとする。それは古来、人類が求めてきた探求課題であるが、その強力な理論の一つがマルクス主義歴史理論である。

ポパーはこれらを「ヒストリシズム」と規定し、その理論は科学法則として成り立たないと徹底批判し、またそこから派生する諸理論についてもヨーロッパ的思惟の伝統にさかのぼって分析批判した。併せて社会科学の理論についてのテーゼも提唱している。

3) 確率論における「プロペンシティ」 傾向性あるいは確定性(両訳併用)

ポパーが提唱する客観的確率論の数理的解釈である。その上で、ポパーは観測者なき量子論を展開している。「不確定性原理」批判である。このテーマを論ずるには確率論の基礎から勉強をせねばならず、道のりは遠い。

4 三世界論について

ポパーはこの主張を「私の知的発見」と自負している。ところがポペリアンは必ずしもすんなり受け入れていない。論証的といえない主張のため違和感を持つ研究者も多い。しかし、ポパーは哲学的(つまり形而上学的)考察を忌避していない。むしろポパーの構想を積極的に

受け入れるべきでないか。

1) まず、ポパーの主張するところを端的に示す。

世界 1 とは物理的対象の世界。世界 2 とは主観的意識経験の世界。

世界 3 とは人間精神の所産の世界。それらが世界を形成する。

2) それぞれの「世界」の詳述。

世界 1 事物の世界、具体的世界である。岩石や大気や水、微生物や植物や動物、もとより人体(脳)も。物理的な力場であり、化学的結合力の場である。さらに人間が作り出した人工物による社会装置・環境世界を含むところの自然界である。またダークマターを含む素粒子、ミクロの世界から、ブラックホールを含む広大無辺の宇宙に至る、いわば無限大の世界である。しかも静止世界でなく、常に変化し続ける動的世界である。

世界 2 生物体の心の世界、自我の世界である。意識状態の世界、心理に関わる世界、主観的知識の世界。知覚、思考、そして不安や希望といった感情、また夢や空想の世界や過去意識、記憶を含むあらゆる種類の主観的な経験の世界。またそれは、人間一人一人の意識の世界であるが、それぞれが 1 個の無限の宇宙であるといえる。

世界 3 客観化された知識の世界、また客観化された感情表現の世界。科学や芸術の諸成果、それらの記録。そしてまた倫理的価値(文章化された規範)や社会的諸制度(したがっ

て社会組織も)。とりわけ図書の世界、つまり書物の内容、記録言語や記号言語で述べられた人間の知識の世界。埋もれた記録や未解読の素材も含む。人間精神の膨大な生産力の所産の結果であり、未来に向けて無限大の世界への広がりを示す。

3) 三世界論における各世界の関係について

(1) それぞれの世界は自律的実在である。

例えば書物とその内容は世界 1 と世界 3 に実在する。建造物や自動車、その設計図書も世界 1、設計内容は世界 3 に実在する、など。

世界 3 自体も自律的である。自然数列(数論)自体は人間が生みだした以上の内容をはらんでいる(実在している)、など。

(2) その三世界は相互関係を持つ。

世界 1 と世界 2、世界 3 と世界 2 は直接的相互関係を有する。

一方、世界 1 と世界 3 は直接的相互関係を有しない。そのため、世界 2 が媒介する。媒介性とは意識と行為である。また世界 2 は、世界 1 や世界 3 からの強力なフィードバック作用を受ける。フィードバック作用とは意識性への触発であり、知識生産への動因であり、意識に対する強力な拘束性である。

さらに、これらの世界を成り立たせているのは、「言語の創発」による。言語は人間に特

有である。つまり人間以外の生命体は世界 1 に埋め込められているが、人間は言語と言語的行為を有することによって世界 2 と世界 3 を別個のものとして形成し、自律させている。

4) 三世界論の意義と課題

(1) 伝統的二元論から新たな三元論へ

デカルト以来のヨーロッパ哲学の伝統的思惟である心身(物質と精神、客観と主観などの)二元論にポパーが一石を投じたといえる。なお一元論(唯物論や唯心論、観念論)も実は二元論の変形に過ぎない。

(2) 人間の「意識」と「知識」の区別の意義

知識を客観化する、つまり実在化するという主張は意表を突く発想である。しかし、知識を客観的実在とするとは、客観的評価にさらし、そのように受け止め得ること。絶対化しないことでの正気をたもつことになる。そして、世界 3 が開かれていること。知識が公共的に公開されているという意義をとらえる。

(3) 世界 2 の探求 ポパーは必ずしも論じていないが。

世界 1 と世界 3 は混沌と秩序が絡み合う世界であって、複雑系の世界でもある。まだまだ未知の領野が広がる世界である。

世界 2 は端的には自我の世界である。つまり個々人のなかの意識世界である。その上で、意識の総体性(集団意識)の実在をどう論ずるべきかの課題が残されている。これは竹内啓氏が問題提起されている。

また現代、①意識の哲学から、意識の科学への展開が急である。世界2は「心脳問題」
として「意識の客観化＝実在性」を目指す探求が進んでいる。

②意識を巡る実在論に向けて多彩な仮説が提起されている。ミーム論、クオリア論、
ダークマター論、量子脳論などがある。

③今や AI に意識は宿るか(生成プロセス仮説から)が論じられている。

5 ポパー哲学への取組みについて

野口幹夫氏の『ベルクソン哲学の延長線』における「21 世紀のベルクソン哲学」の視座に
強く啓発された。「21 世紀のポパー哲学論」を目指しているが遥か遠くにあって未踏である。
たどり着くことができればという思いは強い。

むすび ポパーで印象に残るのは、『哲学者の最高の業績は、誰も気づかなかった謎、問
題、パラドクスに気づくことである。その謎を解くよりはるかに偉大な業績である』という
言葉である。

以上

2024年三水会10月例会報告
ポパー哲学の素描的紹介の参照ノート

波 治 裕 美

1 カール・ポパーとその哲学の紹介；諸文献からの追加抜粋

(1) 高島弘文『カール＝ポパーの哲学』(1973年)

「市井三郎氏があるところで書いたように、まさしく「ポパーは、かつての少数批判者が理性的吟味を通じて多数意見に転ずるという栄光をにないつつある」と言えよう。しかし、ポパーについて特筆すべきことは更にある。それは彼の創造的エネルギーの秘密である。それは哲学というものについてのポパーの根本的な考え方、あるいは哲学者としての彼の基本姿勢の問題である。哲学を有意味な学問にしようとするなら、哲学者は絶えず哲学の外、つまり特殊諸科学や社会的・政治的状況などのなかの哲学的問題を発見し、その解決に取り組まねばならない、と彼は言う。そして彼は自ら一私は力を込めて言いたいのだがーこれを実行した。」

「多少とも『私の考えに注意を払っている著作の多くは、私が決して支持したことのない見解を私のものだとするのが常であり、あるいはまったくの誤読または誤解にもとづいて、あるいは妥当でない議論によって、私を批判している』とポパーはいう。」

(2) ブライアン・マギー『哲学と現実世界・カール・ポパー入門』(立花希一訳)(1985年)

「ポパー哲学の影響を受けた人びとには一同時代の多くの哲学者の影響とは異なり一実践的な影響が著しいということである。彼の哲学は、その影響を受けた人たちの仕事のやり方を変えさせ、あれこれの面で、その生活を改めさせる。要するに、ポパーの哲学は行動の哲学である。しかも各分野で第一級の多くの人びとにこのような影響を与えてきている。・・・しかし、このためかえって、ポパーがよく知られていない一彼より劣った多くの思想家の方がずっと有名である一という奇妙な事実がよけい目立つ。一部は偶然にもよるが、一部はポパーの仕事が故意にではなく誤り伝えられたことに、また一部は彼の方法が、この方法をじっくり検討しなかった人に誤解を助長するような一面をふくんでいることにもよる。」

「この本(『探究の論理』のこと)は、原著が出版されてから四半世紀を経た1959年秋、ようやく『科学的発見の論理』という題で出版された。この英語版は新たに流行していた言語哲学(ヴィットゲンシュタインの哲学)との絶縁を表明した特別の序文をふくん

でいた。しかし言語哲学の主要な雑誌である『マインド』誌は、この序文には言及もせず、わけのわからない書評を載せた。壮年になってポパーは、ちょうど青年時代にオーストリアでされたように、ここイギリスでも再び仲間はずれにされていることを知った。にもかかわらず、ずっと以前から彼が獲得し始めていた独力だけでの国際的名声は広まり続け、ポパーはイギリスで社会的承認を受けた(1965年、ナイトの爵位を授与された)。しかし、オックスフォード大学もケンブリッジ大学も彼を教授として迎え入れようとはしなかった。けれどもロンドン大学(ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス)で論理学と科学方法論の教授となり、大学生活の最後の23年間をそこで過ごした。」

(3) 蔭山泰之『批判的合理主義の思想』(2000年)

「カール・ライムント・ポパーを嚆矢とする批判的合理主義の思想は、物理学、生物学、医学、経済学、経営学、法学、歴史学、政治学など学問の世界だけでなく、政治や教育や芸術などの世界にまで多方面にわたってさまざまな影響を及ぼした。少なくともポパーの名前だけは、さまざまな分野に登場してくるようになった。しかしながら、そのように頻繁に言及され参照されてはいるものの、その思想は今でももう十分に理解され活用されているとは決していえないのが実状である。こうした事態についてさまざまな事情、要因が考えられるだろう。そのひとつとして、その思想の持つ、際立った特異性もあげられると思われる。つまり批判的合理主義の思想は、よく言えば革命的であり、悪く言えば常軌を逸している。このためこれを十分に理解することは、なかなか一筋縄ではいかないのである。」

(4) 政治学・政治思想学者丸山眞男氏(1914～96)のポパー評価

氏はマックス・ウェーバー(1864～1920)と比される大学者であるが、ポパーへの評価は徹頭徹尾辛辣である。1963年、ポパー初来日の際、国際文化会館で会っているが、その時の印象が悪かったようである。以下は世良晃志郎氏との対談(1980年)からの引用。

「非常に印象的だったのは、おそろしく現実感覚がないということです。……論理実証主義を自称し、さかんに形而上学的思弁を攻撃する人が、かえって現実感覚がない、という例によく出会うんです。……その時、ロバート・ケネディの書いた……その本を今世紀最大の著書みたいなことをいうんです。ぼくも読んだけど、……あの程度の書物はザラにある。……大真面目に、二十世紀の傑作だというんです。現実のことを話すと、そういうピンぼけなことをいう」。(ポパーの当該書について論評は見当たらないが)

「論理からいうとあれはカントですね。歴史でなく一般理論についての考え方として

みれば大体賛成なんです。けれども、こと歴史の方法という点からいいますと、一体ポパーは本当に歴史を書いて苦しんだことがあるのか、疑問を禁じえないんです」。

「ポパーに面すると、ぼくは反対のことをいいたくになりますね。歴史に意味を与えるのはわれわれなのだ」とポパーは力説するけれど、その意味付与の主体としての「われわれ」自体が、現在という歴史的状況の中に生きており、日々歴史によってつくられ、また歴史をつくっている人間なのだ、ということこそ、トレルチやマンハイムがあんなに悪戦苦闘した歴史主義の問題だと思うんです。……ランケも含め、マルクスも含め、マイネッケも含め、みんなその問題で格闘している。だからポパーのように割り切ると身も蓋もない話になってしまうんです。歴史それ自体に意味はない、という彼の命題を、歴史はただ1つの意味—ただ1つの真の解釈でもいいですが—しかないわけでない、という命題にいいかえれば、ぼくも賛成です。歴史必然法則と一元史観に反対する点で…。彼はマルクス主義を意識するあまりに、ふつうの歴史家が苦闘している問題—歴史叙述者自身の歴史性という問題—にちっとも答えてくれない」。

報告者にはなんともずれ観、すれ違い観がぬぐえない。こうした大学者においても(あるいは、だからこそ)、かように相互理解と相互批判は難しいのかと感ずるばかりである。

2. ポパー略年譜および関連事項([]で示す)

- 1902 年 7・28 出生、父ジーモン・カール・ポパー、弁護士・法学者。母イエニー。
- 1905 年(3) [アインシュタイン(26 歳) 特殊相対性理論・光量子・ブラウン運動]
- 1914 年(12) [サラエボ事件、第一次世界大戦勃発]
- 1916 年(14) [アインシュタイン 一般相対性理論]、[フランツ・ヨーゼフ帝死去]
- 1917 年(15) [ロシア革命]、[ロマノフ王朝終焉]
- 1918 年(16) 中学校を退学、ウィーン大学入学(不正規)、[1 次世界大戦終結]
[ホーエンツォレルン王朝終焉]、[ハプスブルク王朝崩壊]
- 1919 年(17) 自らを共産主義者とみなすも、まもなく離れる。ノイラートと交友。
[エディントンによる日蝕観測→一般相対性理論が証明される]
- 1920 年(18) アドラーの児童相談所で活動。アルノルト・シェーンベルクの会員に。
- 1922 年(20) 指物師アルバート・ペッシュで徒弟奉公、ウィーン大学の正規学生に。
- 1927 年(25) [ニールス・ボーア 相補性理論]、[ハイゼンベルグ 不確定性理論]
- 1928 年(26) 博士論文『思考心理学の方法と問題』。音楽史でも学位取得。
- 1930 年(28) 中等学校教師に。ジョセフィン・アンネ・ヘニンガーと結婚
- 1933 年(31) 『認識論の二大根本問題』の草稿完成。[ドイツでヒトラー、政権掌握]

- 1934 年(32) 『探究の論理』出版。8 月プラハでアルフト・タルスキーに会う。
- 1935 年(33) 再びタルスキーに会う。秋に渡英する。『ヒストリシズム』の原稿着手。
- 1936 年(34) ハイエクのゼミで『ヒストリシズムの貧困』の草稿を発表。
シュレーディンガーと討論。コペンハーゲンでニールス・ボーアと討論。
- 1937 年(35) ロンドン経由で 3 月ニュージーランドのカンタベリー大学に赴任。
- 1938 年(36) [オーストリア、ドイツに併合される]
- 1939 年(37) [独ソ不可侵条約]、[第二次世界大戦勃発]
- 1940 年(38) 論文『弁証法とは何か』。
- 1942 年(40) 『開かれた社会とその敵』の第一部完成。翌年に第二部を完成。
- 1944 年(42) 『ヒストリシズムの貧困』を『エコノミカ』(44～45)に発表
- 1945 年(43) [ドイツ降伏]、[原爆投下]、[日本降伏]
11 月ニュージーランドからイギリスへ。『開かれた社会とその敵』出版
- 1946 年(44) 1 月イギリス着。以降、終生イギリスに居住。
11 月ウィットゲンシュタインと 15 分間(火掻棒伝説)の激論。
- 1949 年(47) ロンドン大学の論理学および科学方法論の教授に(1969 まで)
- 1950 年(48) 渡米、プリンストンでアインシュタインと討論。ゲーデルと再会。
- 1953 年(51) [ワトソン、クリックによる DNA 二重らせん構造の発見]
- 1956 年(54) [ソ連党大会でフルシチョフ秘密報告・スターリン批判]
- 1959 年(57) 1 月『科学的発見の論理』(「探究の論理」の英語版)出版
- 1960 年(58) 目の手術。同時入院中のシュレーディンガーと議論。
- 1961 年(59) ドイツ社会学会(チュービンゲン)で「社会科学の論理」を報告
[有人宇宙飛行・ガガーリン：ボストーク 1 号] [ベルリンの壁の建設]
- 1963 年(61) 『推測と反駁』出版。 5 月に短期間の来日(第 1 回目)
- 1965 年(63) ナイト爵位(サー称号)を叙勲。ドイツで精神科学賞を受賞。
- 1969 年(67) [有人月面着陸・アームストロング、オルドリン：アポロ 11 号]
- 1972 年(70) 『客観的知識』出版
- 1976 年(74) イギリス王立協会の会員に(20 世紀において哲学者会員はバートランド・ラッセルとの 2 人だけである)。
- 1982 年(80) 名誉勲爵を受爵(卿=Lord 称号)。
- 1982 年～1984 年 『科学的発見の論理』のポストスクリプトを順次出版
- 1985 年(83) ジョセフィン夫人逝去
- 1989 年(87) カタルーニャ国際賞を受賞、[ベルリンの壁崩壊・翌年ドイツ統一]

1991 年(89) [ソ連崩壊]

1992 年(90) 11 月京都賞受賞、来日(第 2 回目)。ポパーシンポジウム開催。

1994 年(92) 9 月 16 日、メイデイ大学病院入院、肺炎と腎不全を併発して逝去

3. 年譜への補足

1) 20 世紀初頭のウィーンとその知的環境

当時は神聖ローマ帝国後継のハプスブルク朝フランツ・ヨーゼフ皇帝の帝都であった。ポパー生誕の頃は既に落日の影が覆い被さっていた。サラエボ事件を発端に、プロイセン・ドイツと同盟して第一次世界大戦を戦い敗戦、王朝は崩壊した。1918 年 11 月に共和国宣言、諸民族は独立して小国となった。この年オーストリア共産党も結成され、武装組織赤衛隊さえ有していた。また南ドイツ・バイエルン・ミュンヘンでは革命勢力によるレーテ(評議会)共和国宣言がだされ、オーストリアへの波及も取りざたされた。

オーストロ・マルクス主義も興隆したが、武力革命闘争には反対した。その社会民主党(カール・レンナー、マックス・アドラー、オットー・パウアーら)はキリスト教社会主義党と連立政権を組んだ。オーストリア共和国はまもなく勃興したヒトラーのナチス・ドイツに併合された。

第二次世界大戦終結後にドイツから独立。永世中立国となったが、東西冷戦体制の狭間にあった。オーソン・ウェルズの映画『第三の男』はそうした緊張のウィーンが舞台である。さらに東欧諸国の社会主義体制崩壊や東ドイツ、ソ連の崩壊に際してもウィーンは情報集約・発信の中心地となった。

ドイツ語圏、カトリック教圏であったが、地勢的にも、歴史的にも、人種・言語・宗教が異なる多民族の錯綜する国際都市であった。そのため多元的で自由主義的な文化を形成した。特にユダヤ人の活躍が目覚ましかった。ドイツ観念論に拒絶的で、また反プロイセンでもあった。自然科学ではマッハ、ボルツマンなどの科学者を輩出。アインシュタインの相対性理論を受け入れる土壌があった。数学者、論理学者、また言語学者など多彩であった。それらがウィーン学団形成の大きな背景になった。さらにブーバーやフッサールもウィーンのフランツ・ブレンターノを源流としていた。

経済学ではオーストリア学派が限界効用説のカール・メンガー(1840~1921)の下に形成された。ベーム＝パヴェルク、フォン・ミーゼス、シュムペーターが輩出された。さらにカール・ポラニー、ハイエクやモルゲンシュテルンが登場した。法学においてもウィーン学派がハンス・ケルゼンによって形成された。純粋法学の理論を確立した。

ウィーン大学医学部からフロイトの精神分析学が誕生し、その門弟たち、アドラーや

ユングなど精神医学が興隆した。

音楽の都としてブルックナーやマーラーが活躍し、やがてシェーンブルクから始まる現代音楽への道も開かれた。またクリムト、シーレ、ココシュカなどによるウィーン分離派美術運動も起こった。

2) ポパーにおける探究への契機、そのエピソード

1919年における様々な体験が自らの理論形成の契機になった。

① 「フロイトの精神分析理論」(無意識論、潜在意識論およびエディプス・コンプレックス=抑圧理論)。ポパーの父ジーモンはジグムント・フロイト(1856～1939)と同年で、特にフロイトの妹ローザの一家とは家族同士のつきあいがあった。フロイト主義が抑圧の意識の分析によって相反する行為であっても矛盾なく説明できることに驚いた。

② 「アドラーの個性心理学」(コンプレックス理論)。ポパーはアルフレッド・アドラー(1870～1937)が設置した児童相談所で働いていた時に、個々のケースワークについて見たこともない患者についても、人間の行為は劣等感によって動機づけられるとして、明解に断定できることに驚いた。

③ 「マルクス主義の理論」(歴史の必然性理論と階級闘争理論)。ポパーは世界大戦後の社会情勢の中で社会主義到来の必然性を説く歴史予言に魅了され、結成されたばかりの共産党に入党もした。マルクス主義歴史主義の正しさの証拠が日々の新聞に見いだされる。階級的偏見で報道が彩られるとの、その分析に淀みがないのに驚いた。ポパーは流血をいとわない犠牲に対する疑問から、間もなく離れた。

以上の3言説は、人間行動や社会的諸事象において何が起ころうとも、自分の理論で説明できるし、その理論の検証になり、正当性の根拠になっている。事象のすべてが理論の正しさのために生起する、いわば万能理論である。そんな理論は果たして科学理論といえるのかという疑問を生じさせた。

④ 一方ポパーはアインシュタインの講演を聞き、その重力理論に基づき、光も普通の物体と同じように太陽のような重い物体によって曲げられると予測した。もし外れる(反証される)とこの理論は誤りであることになると言明したことに強い感銘を受けた。まもなく1919年5月の日蝕観測で、宇宙物理学者アーサー・エディントン(1882～1944)がこの理論を検証した。帰納的でない仮説的理論の正しさが証明された。

マルクス、フロイト、アドラーに発する理論や態度と全く違う。これこそ、真の科学的態度であるとポパーは感じた。科学的態度とは批判的態度であり、この態度は実証を求めるのではなく、決定的テスト(テストされる理論を反駁できるテスト)を求めるもので

あるという結論を持った。理論の対照的存在をポパーは自伝の中で強調している。

ポパーのアルバート・アインシュタイン(1879~1955)への傾倒は首尾一貫、終生のものであった。アインシュタインが言及している以下のような言葉は、そのままポパーのものとなった。「要素的な経験から力学の基礎概念や基本法則を論理的に導き出そうとするあらゆる試みは破産の宣告が下される」。(『理論物理学の方法について』)。「物理学の基礎概念を導き出してくることができるような帰納的方法といったものは存在しない。この事実を理解できなかったことが 19 世紀の大多数の研究者の根本的誤りをなす」。「物理学の基礎はなんらかの帰納的方法を使って、直接経験を蒸留していけば得られるといったものではない。むしろそれは、自由な創意によって初めて獲得しうるものである」。(『物理学と実在』)

3) ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス(London school of economics and political science) ポパーの教授就任の大学で、終生ここに研究の拠点を置いた。

1894 年に創設された。母体はフェビアン協会であり、創設者としてシドニー・ウェップ(社会主義運動家・協会長)、ビアトリス・ポッター(作家)、バーナード・ショー(作家)、グレアム・ウォーラス(政治・社会学者)などが名を連ねている。パリ政治学院(1872 年創設)に習い、政治エリート養成を目指した。社会科学の分野に特化する。

1900 年にロンドン大学に加入。2021 年現在、この分野では世界第 2 位(ヨーロッパ第 1 位)、これまでノーベル賞受賞者 19 人(経済 13、文学 2、平和 4)、各国の首相・大統領・国家元首 53 人を輩出している。

なお、フェビアン協会(1884 年設立)はイギリス社会主義運動の一翼を担う。当時は他に独立労働党(ケア・ハーディ)、社会民主連盟＝マルクス派(ヘンリー・ハインドマン)などが存在した。フェビアン協会は暴力革命を否定し、思想教育運動を重視した。エンゲルスは講師として何度か要請されたが、知識人の運動として毛嫌いし、辛らつ、拒否、没交渉であった(エンゲルス書簡による)。

4. ポパーの邦訳文献目録 (発行の年次順＝ポパー受容の推移を反映)

①『探究論理学序説』 1944(S 19)年 10 月 25 日、500 部

『探究の論理』の第 1 章と第 2 章の部分訳、吉岡修一郎(ベルクソン哲学研究者)による。中村克己他編『ヴィーン学団 科学論理学』に掲載。

②『歴史主義の貧困』 1961 年 5 月 18 日 市井三郎・久野収訳 (中央公論社)

③『科学的発見の論理』(『探究の論理』の英語版＝1959 年による)

- 1971年7月25日[上]、1972年7月15日[下]。大内義一・森 博訳(恒星社厚生閣)
- ④『自由社会の哲学とその論敵』 1973年9月25日 武田弘道訳 (世界思想社)
『The open society and its enemies』の邦訳タイトル
- ⑤『客観的知識—進化論的アプローチ』 1974年8月15日 森 博訳 (木鐸社)
- ⑥『果てしなき探究—知的自伝』 1978年9月25日 森 博訳 (岩波現代選書)
- ⑦『推測と反駁—科学的知識の発展』 1980年3月3日 (法政大学出版局)
藤本隆志・石垣壽郎・森 博訳
- ⑧『開かれた社会とその敵』 1980年3月20日(第1部)、1980年6月1日(第2部)
小河原誠・内田詔夫訳 (未来社)
- ⑨『自我と脳』 1986年6月5日[上]、西脇与作訳、
1986年12月10日[下] 大村裕・西脇与作訳 (思索社)
- ⑩『確定性の世界』 1995年7月30日 田島裕訳 (信山社)
ポパーは生前、1993年9月29日付けで日本語版への序文を送った。
- ⑪『よりよき世界を求めて』 1995年12月15日 小河原誠・蔭山泰之訳。(未来社)
- ⑫『フレームワークの神話』 1998年6月15日 ポパー哲学研究会(7名)訳。(未来社)
- ⑬『開かれた宇宙—非決定論の擁護』 小河原誠・蔭山泰之訳 (岩波書店)
『科学的発見の論理』のポストスクリプトの第2巻 1999年11月25日
- ⑭『实在論と科学の目的』 小河原誠・蔭山泰之・篠崎研二訳 (岩波書店)
『科学的発見の論理』のポストスクリプトの第1巻 2002年3月25日
- ⑮『量子論と物理学の分裂』 小河原誠・蔭山泰之・篠崎研二訳 (岩波書店)
『科学的発見の論理』のポストスクリプトの第3巻 2003年11月26日
- ⑯『カール・ポパー 社会と政治』 神野慧一郎・中才敏郎・戸田剛文監訳
遺稿集『Karl Popper After The open society』抄訳 (ミネルヴァ書房)
- ⑰『開かれた社会とその敵』 小河原誠訳(文庫版・単独新訳) (岩波文庫)
4分冊、順次 2023年2月13日、4月14日、7月14日、10月13日。

なおポパー哲学の紹介や入門書としての文献。年次は邦文出版年

- ① 高島弘文 『カール・ポパーの哲学』(1974年) 日本最初の本格的な紹介と解説の書
- ② ウィリアム・バートリー、翻訳は小河原誠 『ポパー哲学の挑戦』(1986年)
- ③ 川村仁也 『ポパー』(1990年) 清水書院「人と思想 85」
- ④ 関雅美 『ポパーの科学論と社会論』(1990年)
- ⑤ 小河原誠 『ポパー 批判的合理主義』(1997年) 「現代思想の冒険者たち 14」

⑥ ブライアン・マギー、翻訳は立花希一

『哲学と現実世界—カール・ポパー入門』(2001年)

5. ポパー学派(門下生など)

1) 哲学プロパーとして、ポパーの教えを受けた人々を紹介する。

批判的合理主義であるから、師の教えを批判しつつ、自らの主張を深化させる。ポパー言説の研究者をポペリアン(Popperian)と呼ぶ。カルテジアンやヘーゲリアンなどにならう。＊著書は邦訳のあるもの。また没年順である。

イムレ・ラカトッシュ(1922～74) ハンガリー人、ロンドン大学でポパーの後任。

師を凌駕する人物と言われた。ポパーを独断的→素朴な→洗練された「反証主義」としながらも、それを批判し、批判的合理主義から「リサーチプログラム論」へと理論展開を進めた。激動の人生を歩み、52歳での急逝が惜しまれている。もっと着目されてしかるべき科学哲学者である。その本格的評伝・評論の研究が待たれている。

『数学的発見の論理—証明と論駁』(1976年)、邦訳佐々木力(1980年)

『方法の擁護—科学的研究プログラムの方法論』(1978年)、邦訳村上陽一郎・井山弘幸・小林傳司・横山輝雄(1986年)。ポパー哲学を読み解く上でも必読の文献。

市井三郎(1922～89) イギリス留学、ロンドン大学で日本人として初めて直接ポパーに学ぶ。ポパーを日本に紹介した。『哲学的分析』(1963年)。

ウィリアム・W・パートリー3世(1934～90) アメリカ・ウィルキンズパーク生れ。

ポパーの高弟であるが、ポパーの「境界設定問題」をめぐる大論争となり、鋭く対立した。一方ポパーの委嘱を受け、『ポストスクリプト』の編者となる。そしてポパー哲学の批判的研究を進めていたが、55歳で急逝した。

『Wittgenstein (邦題ウィットゲンシュタインと同性愛)』(1985年)、訳小河原誠
『ポパー哲学の挑戦』(論集として独自編集 1982～1984年)

ポール・K・ファイヤーセント(1924～94) ウィーン生れ、ロンドン大学でポパーに学ぶ。すべての方法論を否定する徹底した知のアナーキズムを主張した。

『方法への挑戦』(1975)、『自由人のための知』(1978)、『理性よ、さらば』(1987)

ジョン・W・N・ワトキンス(1923～1999) イギリス・

『科学と懐疑論』(1984年) 邦訳中才敏郎、『ホップズーその思想体系』(1973年)

エルンスト・トーピッチュ(1919～2003) ウィーン生れ。ハンス・アルバートとの共同研究を通じて影響を受ける。

『イデオロギーと科学の間』(1966)、『認識と幻想—世界理解の根本構造』(1977)

ハンス・アルバート(1921～2023・102歳で没) ケルンに生れる。トーピッチュを介してポパーと知り合う。ポパーの後継者ともいわれていた。

『批判的理性論考』(1963年) 邦訳萩原^{よしひさ}能久(1985年)。他にウェーバー研究など。

2) 日本ポパー研究会(The Japan Popper Society)

1989年10月29日に発足、翌年に総会を開催し、現在に至る。

山田雄三、安井琢磨、団藤重光、沢田允茂などの各氏が顧問であった。

初代会長は碧海純一氏(法学)、現在の会長(6代目)は富塚嘉一氏(会計学)

本年の総会は34回目である。年に一度の研究大会と機関紙『ポパー通信』を発行。

会員は哲学者や哲学研究者だけでなく、というよりむしろ各分野からの会員のほうが多いように見受けられる。

また、設立に当たって、ポパーからメッセージが届く。『・・求めに応じて、・・この書信をお送りいたします。これはわたくしの好むところのものではありません。・・もっとも重要な義務のひとつは、知的に謙虚でなければならないということ、・・もしなにか「ポパー研究会」のようなものを認め、歓迎するならば、自分に知的謙虚さが欠けていると感じます。その一方で、研究会の必要性があるかもしれないことは認めます・・討論の必要性はきわめて大きいかもしれないということです。』なんともポパーらしい。

6、科学者との交流

哲学者より、科学者の方がポパーの言説に影響や刺激を受けた者は多い。

エルヴィン・シュレーディンガー(1887～1961) ウィーン生れ、波動力学で1933年ノーベル物理学賞。親交は長く、また議論仲間であった。

フリードリッヒ・ハイエク(1899～1992) ウィーン生れ、1974年ノーベル経済学賞。徹底した自由経済主義者。マルクス主義やケインズ主義を徹底批判する。『隷属の道』、『科学による反革命』など。

コンラート・ローレンツ(1903～89) ウィーン生れ、ポパーの幼友達でもある、1973年にノーベル生理学・医学賞。二人の対談(1983年)集『未来は開かれている』。

ジョン・エックルズ(1903～97) オーストラリア出身、1963年ノーベル医学・生理学賞。ポパーと『自我と脳』。物質世界と独立に精神世界の存在を主張。

アーント・ゴンブリック(1909～2001) ウィーン生れ、美術史家。父親同士が弁護士仲間として親交があった。ポパー夫妻のニュージーランド亡命中はロンドンにいて、連絡とバックアップ活動をしていた。

ジャック・モノー(1910～76) フランス、1965 年分子生物学の草分け、ノーベル生理学・医学賞受賞。著書『偶然と必然』(1970 年)は世界的大ベストセラー。必読の書。

ピーター・B・メダワ(1915～87) 1960 年に「後天的免疫寛容」の発見でノーベル医学・生理学賞を受賞。科学論『科学の限界』、『発見から創造へ』などでポパーを評価している。

イリヤ・プリゴジン(1919～2003) ロシア生れ、ベルギーで活躍。1977 年ノーベル化学賞。散逸構造理論を確立。『混沌からの秩序』、『存在から発展』などの科学論。

7. ウィーン学団 補足

物理学の新たな勃興の中で、哲学の革新を目指す気運が高まった。担い手の多くは科学者であった。リーダーのモーリッツ・シュリック(1882～1936)も物理学者であった。学団発足はシュリックのウィーン大学着任(1922 年)による。ウィーン学団の登場は 1929 年の『科学的世界把握・ウィーン学団』の発刊からである。ところが 1936 年、シュリックが暗殺され、1938 年のオーストリアのドイツ併合で完全に瓦解した。活動は 16 年間にすぎず、亡命先の英米、特にアメリカでの活動は続いたが、ついに学団が復活することはなかった。

ウィーン学団は次の 2 文献に多くを依拠している。アルフレッド・ホワイトヘッド(1861～1947)とバーバード・ラッセル(1872～1970)による『Principia Mathematica』(1910～13)と、ルートヴィッヒ・ウィットゲンシュタイン(1889～1951)の『論理哲学論考(Tractatus Logico-Philosophicus)』(1921 年)であった。彼らは学団のメンバーでなかったが、その影響は絶大であった。

その主張は「統一科学の形成」、「形而上学の否定」、「有意味性基準の追求」で、方法としての論理分析、言語分析を追求した。その探求は記号論理学、数理哲学、言語分析、様相論理学などの諸論理学、論理演算などからコンピュータ言語の分析などにつながる道を切り開いた。分析哲学は一方で、文章の有意味性、無意味性を問い、哲学は言語ゲームであると主張するようになった。

しかしまた、哲学それ自体の探求について次のようなスタンスを堅持したといわれる。
①客観性の要求。個人の主観性に依拠する部分を排除する。②他の学問の領域を侵さない。③哲学と呼ばれてきた知的活動と何らかの連続性を保つこと。

シュリックの後継として、オットー・ノイラート(1882～1945)、ルドルフ・カルナップ(1891～1970)、ハーバート・ファイグル(1902～1988)、アルフレッド・エアー(1910～1989)などがあげられるが、氏名だけにとどめる。

論理実証主義の諸テーマをめぐる論争は今や話題にもならないと感ずる。しかし、ポパーの主張した反証可能性の理論(誤ってストレートな反証理論と捉えられる)が、一種の逆説的論証であるため、その正当性を巡る論議は続いている。

ノーベル賞受賞物理学者ワインバーグ(1933～2021)は、『現在「科学哲学」という興味深い研究分野が存在するが、これは科学研究そのものにはほとんど影響力を持っていない』という。多分圧倒的多くの自然科学者は同感の思いでいるだろう。

しかし、ウィーン学団のもともとの問題意識は精神科学(社会科学のこと)の科学性と科学方法論の探求にあったはずである。この分野では必ずしも実りあるものは生みだしていないように感ずる。対照的にポパー理論の影響は大きい。

8. ポパーのマルクス主義批判に対するマルクス学派からの応答

今報告のテーマでないがその入り口的紹介として、冗長的であるが補足したい。

『ヒストリシズムの貧困』ならびに『開かれた社会とその敵』にマルクス主義(専門職)理論家を自認する研究者は真正面から受けとめ、その応答を通してマルクス主義理論の深化に向かったかといえ、そうはならず、無視を決め込んだようにも見えた。

マルクス主義(者)からの反論・応答の論書は管見の限りでは以下の通りである。

① ジョン・ルイス(1889～1976) イギリス、元長老教会牧師という経歴の指導者。

『Marxism and the open mind (邦題「マルクス主義と偏見なき精神」)』1957年刊、邦訳 1959年刊(岩波)、真下信一・竹内良知・藤野渉訳。この著書はスターリン批判後のマルクス主義はいかにあるべきか、その希望を考察した渾身の書である。マルクス主義者は熟読すべきであろう。スターリン批判後もソヴィエト・ロシアでの克服されない問題を指摘し、その行く末にも厳しい見方をする。

ポパーについて触れているところから。「ポパーの2巻の書物はバーリンの講義よりもまったく高い水準に達している。彼の書物は学者らしく、厳密に論じられており、平衡がとれていて、まったく狂信がない。ポパーとはどんなに意見を異にしている人でも、彼の書物を読み、彼と議論をすることはいつでも楽しいことであって、彼から離れたときにはいつでも思想の弁証法的交換をしたために前より賢くなっているのが常である」。もとより、この書ではポパーへの反批判も展開している。

② モーリス・コーンフォース(1909～80) イギリス、最も著名なマルクス主義理論家・哲学者といえる。論理実証主義批判の『哲学の擁護』が知られている。

『The open philosophy and the open society (開かれた哲学と開かれた社会)』、なおサブタイトルは、「A Reply Dr. Karl Poppers Refutations Marxism」である。1968 年刊、邦訳は 1972 年、城塚登・米永政彦・新山春子・遠藤克彦訳(紀伊国書店)。

この著書はマルクス主義陣営からのポパーに対する唯一の全面的な反駁の書である。著者は「私は、マルクス主義の諸批判に対する論考を尽くした返答としてこの著書を成り立たせるという方法をとった。・・・返答すべき者としてただ一人、カール・ポパーをえらんだ。・・・ポパーのマルクス主義に対する主張が、すべての場合、マルクス主義はドグマの体系以外の何ものでないという彼の主張にもとづいているからであり、それゆえマルクス主義に対する彼の議論は、マルクス主義はそれと反対の合理的・科学的な学理であるという議論をはじめのための、適当なきっかけをふくんでいる。」としている。更に、「彼(ポパー)は現代の批判者のうちで最も著名であり、そしてすぐれた能力と力とをもって彼の主張を提示するばかりでなく、彼がマルクス主義の重要な論点となすものは、今日の論争のなかで最も重きをなしている、マルクス主義に対する主要な論点のすべてを実際にふくんでいるからである」。

また、コーンフォースは次のようにもいう。「この著書はポパーに対する論駁ではなく、マルクス主義に対する彼の論駁への返答である」ことを強調している。なぜなら「ポパー自身は、科学的方法の諸原理を代表する者として、近代の学界において挑戦されえぬ地位を占めている。彼の業績は第一に彼の有名な著書『科学的発見の論理』に、次に・・・多数の論文において・・・近代の思想に偉大かつ有益な影響を与え、・・・私はそのほとんどの部分を受け入れ、ほとんどの点で一致している」というスタンスである。ここでの論者の「論駁」と「受容」の間の切断あるいは関係性をどう理解すべきなのか。

また訳者はあとがきで「コーンフォースがマルクス主義の立場にたって、ポパーのマルクス主義批判に真正面から反論しようとしたものであり、この批判(論駁)と反論(回答)というダイナミックな展開のなかで、マルクス主義を硬直した理解から解放し、現代に生きる「開かれた哲学」として提示するのが、本書のめざすところである」としている。この「めざすところ」を感受するのは困難、というのが率直な感想である。

いずれにしろ、上述の二書を過去のものとししないで吟味の対象とすべきことが未だマルクス主義者やマルクス主義研究者に残されているのでなかろうか。

③ 秋間実先生(1928～) 北大・都立大などで哲学教授を歴任。

『カール・ポパーとマルクス主義哲学―歴史法則を中心に―』:『科学と思想』1971 年 10 月号(新日本出版社)に掲載の論文。長文であるが引用しておきたい。

論文の冒頭「かつてわたしは、分析哲学の反主流の論客ポパーとの対決こそマルクス主義哲学の発展のために必要である、と書いたことがある。その理由は、つぎのとおりである。マルクス主義哲学の立場からポパーの仕事を見てみると、第一に、その一般的・基本的性格において、現代観念論のそのほかの代弁者たち一すなわち、分析哲学の主流をはじめ、実存主義・現象学・プラグマティズム・トマス主義などのグループにはいる人びと一の見解よりもずっと肯定的に評価できる点があるし、第二に、その個々の具体的主張において、マルクス主義哲学のそれと似かよった関心のもちかたや問題のたてかたがあり、マルクス主義哲学のそれとじかにかかわりあう解決のしかたがある。・・・こうした共有部分や接点があるために、マルクス主義哲学者は、一定の範囲内・程度においてではあるがいわば同じ土俵の上でかみあった討論を交わすことができる。もちろんポパーはマルクス主義者ではないどころか、最も決然としたマルクス主義批判者である。だから、結局のところ、マルクス主義哲学にたいする「対抗思想」の一形態にすぎない。このことから、それが、マルクス主義についての誤解や曲解をふくむばかりではなく、観念論および「悟性論理」につきものの消極的特徴をいくつか示すであろうということは、用意に見当がつくわけであるし、この推測は正しい。・・・とはいえ、もしマルクス主義哲学の立場に立つと称する者が、ポパーとの対決にあたって、ただこうしたことどもを論証することだけをめざし、これに成功すればそれでもうポパー批判は終わるのだなと思いこんでいるとしたら、それは、かなり一面的なしかたでポパーの仕事に対処することにしかないだろう。そういう「批判」にはあまり説得力がなく、それは、マルクス主義哲学者とまじめなポパー哲学信奉者とのあいだの対話をなりたたせ、さらに、みのりあるものにするのに、役立たないであろう。それはまた、マルクス主義そのものの前進にも役立たないであろう。マルクス主義哲学者は、ポパーと同じテーブルについてことがらに即した討論をかわし、そのさい、批判しなければならない点はどこまでも批判するとともに、当の問題についてのマルクス主義哲学の見解を積極的または創造的に展開してそれに対置することに力を入れなくてはならない」。

関連して『弁証法と現代』という著書に触れたい。『日本におけるマルクス主義弁証法』（『Marxistische Dialektik in Japan』1987年発行）という日本のマルクス主義(哲学研究)者による東ドイツに向けた紹介論文集の邦訳版(1989年5月発行)である。

その掲載論文の中に『現代日本の思想状況とK・ポパーの理論』がある。当時の東ドイツでポパー文献は多分禁書(?)。学者間ではどう論じられていたかはわからない。おそらく表立っては知られていないのでないか。あるいは西ドイツからの文献流入による

影響はあったかもしれない。それを前提として「日本ではカール・ポッパーの影響力の増大を危惧する」かのような論調で紹介している。学者の言説とはとても思えない。

「ポッパーの理論を一つの中心とする思想潮流は、この「批判的合理主義」と「自由主義的民主主義」の立場からコミュニズムあるいはマルクス・レーニン主義に対する批判を強めており、日本でも無視できないところに来ていると思われる」として、以下の3点の特徴を指摘している。

(1)として、「官学アカデミズムが戦後不十分ながらもその戦争責任を問われる雰囲気の中で英米型プラグマティズムと新実証主義が「戦争責任のない」「民主主義的」な思想として一部の人びとに受けいれられていった。久野収、市井三郎、上山春平というような、一定のリベラルな傾向さえもった人びとがポッパーの思想に共感を示し、また同時にこの人びとはポッパーをよりどころにすることによって、マルクス主義と弁証法的唯物論に一定の距離を保つこととなった。」、「東大の碧海純一などの法学者がポッパーの理論をよりどころにして、マルクス主義的な社会諸科学に敵対する「批判的合理主義」を主張している。

(2)として、「いまや実存主義などの非合理主義・心情主義とプラグマティズム・新実証主義などの「科学技術万能主義」とが相互補完しつつ、現代ブルジョア思想の主要な二大潮流を形づくっている。その流れの中でポッパーは重要な中心的役割を担わされてきている」。

(3)として、最近では一部の労働団体の中へポッパーの思想が日本独占資本によって意識的に持ち込まれようとしており、ここに問題の重要性がある(富士政治大学校の教科内容に位置づけられていることから)、「日本の反動勢力は日本の伝統的な特殊性を絶対化して「日本精神」「日本文化」などをとなえる非合理主義やハイデガーやヤスパースなどの主として戦後輸入の実存主義的非合理主義などを利用しながら、しかし中心的な世界観としてはポッパーらの「批判的合理主義」を基軸にして、日本保守勢力の思想的再建をはかろうとしているように見える」としている。

これらポッパー批判の具体的内容に関する吟味は別の機会にと思うが、この著者は果たしてポッパー文献を精査しておられるのだろうかという疑念は拭えない。日本保守勢力の思想的基盤というものとポッパーの哲学とがどのように結びつくのか、寡聞にして、そうした論述展開した文献などに出会ったことがない。なお、ベルリンの壁が壊されたのはこの年の暮で、翌年の10月に東ドイツ自体が消滅した。その後、東ドイツのその学者たちはどうしたのか、気になる。また東ドイツのサハロフ、物理化学者ロベルト・ハーヴェマン博士(1910～82)のことが思い起こされる。『Fragen-Antworten-Fragen(邦題二

つの時代の証言)』(1970年・翌年邦訳出版)『Ein deutscher Kommunist(邦題わたしは亡命しない)』(1978年・邦訳は1980年)

最近、『開かれた社会とその敵』の小河原誠氏による新訳(岩波文庫)完結に合わせて、『しんぶん赤旗』に田代忠利氏(党出版局長)の小論稿が掲載(2023年12月12日)された。『社会発展の法則性と人間の能動性を対立させる議論』というタイトルである。氏は、ポパーはマルクスの引用を自説に有利になるよう言葉を追加または省いていると批判して、それによって読者を誤導して、また恣意的に解釈していると主張する。マルクスに対しては「暴力革命」で一貫して歪めている。マルクスは法によるルール作りが未来社会を準備すると考え、変革が「よりヒューマンな形で」進むことを期待したと説く。社会主義が必然とは、「いずれは到達する」という意味であるとする。末尾を「ヒトラーとスターリンに立ち向かう」という執筆動機からマルクスをスターリンの源流としたため、マルクスの真意をつかめなかったのでしょうか」と結んでいる。限られた字数での記事論説であるが、政党のコミュニケはこんなものであろうか。慨嘆するばかりである。

今回の刊行で報告者が着目したのは、この文庫版がドイツ語版(第8版2003年)を底本として、また第7版のポパーの序文(1992年)を掲載していることである。

ポパーは第7版と同時に出版されたロシア語版(ロシアでは初めての出版か)の『ロシアの読者への手紙』をここに転載した。ポパーが強調したのはソ連が崩壊したからそれでよしとしない。かつて法治国家というものの存在しなかったロシアは困難で、簡単ではないと訴える。法律家と裁判官の独立なしには法は守られない。刑法についていえば、「なんびともその罪があらゆる合法的な疑いをこえるほどに証明される以前においては有罪と見なされてはならない」。法によって恐怖の体制を克服しなければならない。また法的枠組みなしには自由市場も成立しない。等々を呼びかけている。現今のプーチン政権の全能の専制ぶり、ロシア国民の従順ぶりは、ポパーの呼びかけの重たさを思い起こさせる。今報告に関係ないが、カール・A・ウィットフォーゲル(1896～1988)の『オリエンタル・デスポティズム』に関する諸論考が思いだされる。その再評価と吟味から現代を照射する新たな理論展開が求められているのではないかと思う。

ポパーはドイツ語版に『イマヌエル・カント 啓蒙の哲学者』という小論(講演録)も掲載している。推測的に述べるが、ドイツの宿痼に気づかせたいように感ずる。ドイツはフィヒテ、ヘーゲル、ハイデガーによってドイツ観念論を極限まで展開させ、そのロマン主義で世界の破局を先導した。カントの哲学に立ち返って、その啓蒙主義から学べべきと訴えている。その線上で自著を読んでほしいといっている。

また、歴史家からの応答としては、ソヴィエト・ロシア史研究の大家イギリスのエドワード・ハレット・カー(1892～1982)による、連続講演(1961年)とその出版物『歴史とは何か』(清水幾多郎訳・岩波新書)がある。この書は今でも名著の誉れが高く、よく読まれている。ポパーはアイザイア・バーリン(思想史家・哲学者：1909～1997)と並んで痛烈な批判の対象になっている。以下、少し引用しておきたい。

「カール・ポPPER教授といえば、1930年代、ヴィーンで科学の新しい見方について大著—最近、これは『科学的研究の論理』という標題で英訳されました—を書いた人ですが、大戦中、『開いた社会とその敵』および『歴史主義の貧困』という少し通俗的な書物を二冊、英語で出版いたしました。これらの書物は、ポPPERがナチズムの精神的祖先と考えるヘーゲルとプラトンへの、また、1930年代のイギリスの左翼の知的風潮であった、かなり浅薄なマルクス主義への反動から強烈な感情的影響を受けて書かれたものです。主たる標的はヘーゲルおよびマルクスの決定論的歴史哲学と称するもので、ポPPERはこれを『歴史主義』という乱暴な名称で一括しております。・・・」

歴史研究者が書いた文章とは思えない、正確に翻訳したものであろうが極めて粗雑な内容といわざるを得ない。カーの見解に対する批判点や論点への分析と吟味も大いに意義ある課題と考えているがこれ以上は触れない。それよりも、カーの学問的業績、歴史解釈はソ連崩壊以降、どう扱われているのか、その評価が気になるところである。

9. フランクフルト学派＝ネオ・マルクシズムについて

フランクフルト学派とは、フランクフルト大学(1914年創設)に設置された「社会研究所(Institut für Sozialforschung 1923年開設)」の研究者集団をいう。初代の所長はウィーン大学の法学者・政治学者のグリュンベルクであった。彼はオーストリア・マルクス主義の創始者であった。彼自身の立場は、非ヘーゲル的で、エンゲルス、カウツキーの伝統に立つものであった。公式には政党と何の接触も持たず、政治的影響を受けないよう努力した。そのメンバーには、ヘンリク・グロスマン(1881～1950)、カール・ウィットフォーゲル(1896～1988)、フランツ・ボルケナウ(1900～59)といった共産主義者もいた(彼らは後にソ連共産党に批判的立場をとり、離党する)。

1931年にマックス・ホルクハイマー(1895～1973)が所長となった。彼は社会哲学を主張し、実証主義を批判する立場を取る。ヘーゲルと弁証法を重視する社会研究を目指した。しかし、ヒトラーの権力掌握により、研究所はスイスに移動、メンバーはイギリスやアメリカに亡命する。1939年のヒトラー・スターリン協定の衝撃は大きく、両体

制の類似性が論議された。

戦後、フランクフルト大学社会研究所は再開され、アドルノに指導され、第二世代が形成される。その中心はハーバーマスであった。そのスタンスはマルクスの思想を受けつぎながら、現代の立場からそれを解釈し直すことによって「批判理論(Kritische Theorie)」を展開するということにあった。その理論的特徴は社会の(有機的)全体性の主張であった。例えば、ハーバーマスの主張を若干紹介する。社会はその部分の総和以上のものである。従って全体を有機体論的に把握するには、非弁証法的(形式論理学)でありえない、弁証的な総体性として社会は概念的に把握せねばならないとする。つまり、

1. 社会科学は無性質のデータを処理するのではなく、社会的相対性の連関によって構造化されているデータだけを処理する。

2. 理論は経験において証明される。制御された観察であってはならない。思想は事態そのものと適合する概念として証明されねばならない。

3. 理論と歴史の関係において、弁証法的社会理論は個別諸現象の総体性への依存関係を主張する。その分析は歴史的発展の方向性を規定する客観的連関をめざす。

4. 科学と実践の関係においては、厳密に経験科学的に個々の出来事の因果的説明に限定するものではない。全社会に対して主体として責任をとりうる行動のパースペクティヴを展開させる。実践的問題と技術的問題の達成の裂け目について指摘する。等々。

従って、自然科学的実証主義の科学理論を社会科学に適応することに反対する。論理実証主義者は形式主義的論理を絶対視して社会事象に押し付ける、それは社会的事実に対して論理に従えと命令するに等しく無意味であるとする。

なお、批判理論はヘーゲルの弁証法とフロイトの精神分析を理論形成の基軸にしている。ハーバーマスの言説に対する日本社会学者の共感者は少なくない。『コミュニケーション的行為の理論』(1981年)をはじめとする氏の膨大な著作はよく読まれている。

チュービンゲン大会の後日談として

この大会後、1963年にユルゲン・ハーバーマス(1929～)が両者の対決を際立たせるべく『分析的科学理論と弁証法』という論文を発表した。翌年春にポパーを支持してハンス・アルバート(1921～2023)が反論の論文を出し、秋には再びハーバーマス、65年秋にアルバートが交互に批判をすすめた。

1969年に彼らの応答を掲載した報告論文集が『ドイツ社会学における実証主義論争』として出版(邦訳は1979年)された。ポパーとアドルノの報告講演を冒頭に置くのではなく、『序論』(テーマ的題目はない)としてアドルノの長大論文が置かれるなど異様な体

裁であった。なおアドルノは論文完成後に急死しこれが最晩年の著作となった。

出版後にポパーは「出版されてみるとアドルノ氏は、一緒にすると 100 ページになる 2 つの論難を巻頭に置いた。そしてわたくしの講演録の後に、アドルノ氏の共同報告と、会議で発表されたわけではない諸論文が続くのである。『実証主義論争』の読者は、わたくしの講演が討論の始まりであって、アドルノ氏の攻撃的な巻頭の 100 ページはずっと後になってこの書物のために書かれた事をほとんど知ることもできなかった。」と苦言を呈している。

アドルノはその論文を序論ではなく、討論と論文類の総括論文として末尾におくべきで、またポパーにも同様の趣旨で論文作成を要請するのが学者としての礼儀というものではなかろうか。フェアな論法といえない。

ポパーは「論理実証主義」の厳しい批判者であり、「実証主義者」と自認したこともない。ところがアドルノによって「弁証法と最広義の実証主義的社会学との公開の対決」とされた。これではポパーは実証主義者の代表である。「序論」は不正確な言いづろいである。この学会の背景として、ドイツの社会学・社会科学の歴史的学界動向を知ることは、この論争が低調であったとしても、不可欠であろう。その意味で、山本鎮雄氏の『西ドイツ社会学の研究』（1986 年刊）は学ぶことが多く、ぜひお勧めしたい。

10. 「社会科学の論理」へのポパー・テーゼ

チュービンゲン大会でのポパーの冒頭報告の「27 のテーゼ」を、報告者による独善的要約の恐れがあるが、以下に示しておきたい。参考と吟味をお願いしたい。

第 1 われわれは多くの事柄を知っている。

第 2 われわれは限りなく、また驚くほど無知である。

第 3 認識論は上の二つのテーゼに合致し、かつわれわれのどこまでも不断に増大していく知識と、われわれは本来何も知らないのだという、これまた次第に深まっていく洞察との間の関係を明らかにしなければならないという点である。認識の論理は知と無知の緊張に関わっている。

第 4 認識は知覚や経験、あるいは資料や事実の収集と共に始まるのではなく、問題と共に始まる。問題はすべてわれわれの既得の知識とわれわれの考えた限りでの事実との間の外見上の矛盾に気づくことによって生れる。

第 5 問題はいつも理論的な事柄でなければならないということは決してない。貧困、文盲、政治的抑圧、法秩序の不安定といった、きわめて実践的な問題が、社会科学研究における重要な出発点であった。こうした実践的問題は熟考され、理論化されることに

よって理論的問題になる。科学的な仕事の出発になるのは問題産出的観察なのです。

第 6 主要テーゼを定式化しましょう。

(1) 社会科学の方法は、自然科学と同様、問題のための解決の試みを吟味精査する点にある。解決策は提案されかつ批判される。

(2) 解決策が事実によって批判しうるものであるならば、それを反駁しようとする。

(3) 解決の試みが批判によって反駁されたときには、別の解決を試みる。

(4) 解決案が批判に耐えたらその案を暫定的に受け容れる。しかしそれは、さらに討議され批判される価値があるものとして、である。

(5) 科学の方法とは、最も厳しい批判によってコントロールされた暫定的な解決の試みの方法である。試行錯誤の方法を批判的に発展させたものである。

(6) 科学の客観性は、批判的方法の客観性にある。いかなる理論も批判を免れないということと、批判の論理的補助手段である論理的矛盾のカテゴリーが客観的であること。

第 7 誤った方法論的自然主義がある。社会科学においてもその科学的方法を自然科学から学ばねばならないと主張する立場である。社会科学にあつては客観性の獲得は困難である。

第 8 戦前の社会学の理念は理論物理学にも較べうる一般的理論社会学の理念であつた。一方、社会人類学の理念は、特殊な社会に適用した理念であつた。それが現在は逆転してしまった。

第 9 人類学が社会学の上に立つ、この逆転は擬似・科学的方法の勝利を示している。

第 10 相対主義への注意。真理とは客観的に実在するものでなく、時代時代にそれぞれの真理があるという歴史的相対主義、また真理とか科学は一定の集団や階級に相応したものとして存在する社会学的相対主義がある。

第 11 科学の客観性が科学者の客観性に依存しているというのは全く誤った仮定である。自然科学者はすべての人間と同様に党派的である。一面的かつ党派的な態度で自己の理念に固執している。

第 12 科学の客観性と呼びうるのは唯一もっぱら批判的伝統、あらゆる抵抗にさからって支配的なドグマを批判することを可能にしてきた伝統のうちにある。科学の客観性とは社会的な事柄である。

第 13 知識社会学は、客観性を個々の科学者の行動の中に認め、非客観性を科学者を科学者の社会的位置によって説明するが、知識社会学が見過ごしているのは、ほかならぬ知の社会学、科学の客観性に関する社会学的理論である。

第 14 批判的討議に当たって二つの問題を区別する。第一、当該の主張の真理問題、す

なわれわれが取扱っている問題に対してその主張が持つ重要性、関心度、意義といった問題。第二、さまざまな科学外的な問題。例えば人類の福祉の問題や国家の防衛・軍事政策、産業の発展や私的富の増大の問題に対して当該の主張が持つ。こうした科学外的な問題を科学的研究から排除することは不可能である。

第 15 純演繹論理の最も重要な機能は批判の道具という機能である。

第 16 演繹論理は論理的推理ないし論理的推論の妥当性の理論である。妥当な推理の前提が真ならば、結論もまた真でなければならない。

第 17 演繹的論理とは、前提から結論に真理を移行させる理論であるばかりでなく、同時に反対に結論から少なくとも一つの前提に虚偽を遡行させる理論でもある。もしある妥当な推論において結論が偽であるならば、前提がすべて真であることはありえないからである。

第 18 かくして演繹論理は合理的批判の理論になる。もしわれわれがある主張から認めることのできぬ結論を導くことに成功したならば、その主張は反駁されたといえる。

第 19 科学においてわれわれは理論、すなわち演繹的体系を用いて仕事をしている。その理由、第一、理論ないし演繹的体系は、一つの説明の試みである。第二、理論、したがって演繹的体系は、その結論によって合理的に批判されることができる。

第 20 真理と説明の概念。ある言明が事実に一致ないし対応しているとき、あるいは言明が叙述している事物がまさにそうあるとき、その言明を「真である」という。これは、いわゆる絶対的・客観的真理概念である。二つ目は、説明、つまり因果的説明の概念である。完全に明確な説明は、つねに被説明項を理論および初期条件から論理的に導き出すことにある。

第 21 純観察的科学などは存在しない。意識的かつ批判的に理論化した科学だけが存在する。

第 22 心理学は社会科学の一つである。われわれの試行や行動は深く社会的諸関係に依存する。社会を心理学的に説明し、社会を心理学に還元することは不可能である。社会環境を記述することこそ、社会科学の基本課題である。

第 23 社会学は心理学から完全に独立でありうるし、独立でなければならないという意味で自律的である。社会学は、人間行動の意図しない、望みもしなかった社会的帰結＝社会現象を説明する課題に立たされる。

第 24 社会学はしばしば「知識社会学」と呼ばれるものとして自律的である。

第 25 経済学の方法の論理的研究の成果は、すべての精神諸科学に適用される。社会科学において客観的理解の方法ないし状況論理と呼びうるような純客観的方法が存在す

る。人間の行動を心理学の助けを借りずに状況から説明しうるように、人間の状況进行分析する。この方法を「状況論理」と呼んでいる。

第 26 状況分析の説明は、合理的理論的な再構成なので、極端に単純化し図式化しすぎており、一般論としては誤りである。しかしこの説明は真理への接近度の高いものであるといえる。合理的かつ経験的に批判可能で改善可能である。これと反対に心理的・性格論的仮説は合理的議論によって批判できる場合がきわめて少ない。

第 27 状況の論理は一般にわれわれが行動している物理的世界を前提にしている。さらにこうした世界を超えて、われわれがその目標を知っている他の人びとによって構成された社会的世界、さらに社会制度によって構成された社会的世界を前提にしている。社会的世界におけるすべての社会的存在物から成り立っている。

これらを踏まえてのポパーによる提案は次のとおりである。

「純理論的社会学の根本問題としては、暫定的にはあるが、一般的状況論理学と制度に関する伝統の理論とが考えられる。それは次の二つの問題を含む。

- 1) 制度が行動するのでなく、ただ諸個人が制度の中で、また制度のために行動する。諸個人の行動の一般的状況論理学が、いわゆる制度の運動理論であるといえよう。
- 2) 目的行動の意図もされず、意欲もされなかった制度的帰結に関する理論が構成されねばならない。これはさらに制度の発生・展開の理論に発展しうるであろう」。

ポパーはこのテーゼで、社会科学における理論構築のための構想について問題提起している。しかし、その提起を受けての具体的議論の発展は生ぜず、またその後においても論究されるに至っていない。特に着目した研究者もいないようである。

唯一、ロルフ・W・プリム、ヘリベルト・ティルマンによるドイツ文献『社会科学の科学』(1979 年、邦訳は金子光男とライムント・クルムアイヒによる、1987 年多賀出版刊)をみるだけである。この書は、批判理論に対峙するだけでなく、ドイツ社会科学の頂点に立つマックス・ヴェーバーの方法論との比較、対決、接合などを考察・論究していて、注目に値する。

なお、これらポパー・テーゼを読み解くための必読サブテキストとして、報告者が推奨するのは、富永健一氏(1931～2019)『人類の知的遺産 79、現代の社会学者—現代社会科学における実証主義と理念主義—』(講談社、1984 年刊)、著者は「現代の社会科学思想」あるいは「現代社会科学の諸潮流」というタイトルにしたかったと述べておられる。その意味がよくわかる力作である。

いずれにしても、このポパー・テーゼの延長線からの収穫(理論形成)の課題は残され

ている。社会科学研究者からの具体的応答を知りたいところである。

経済科学や経営科学、経営経済科学などの分野でポパー科学論の占めるウェイトは意外と高い。その概要を文献目録の形で示したい。但し、いずれも最近出版のものでなく、最新の動向については全く無知である。状況が変化しているかもしれない。

ハンス・タフエー、ボド・アベル編著『現代科学理論と経済学・経営学方法論』(1979)
監訳小島三郎(1982年)

K・シュミーレビッチ 『経済科学方法論』(1979年) 邦訳鈴木英寿、坂野友昭(1984)

G・シャンツ、小島三郎編 『経済科学と批判的合理主義』(1987年)

G・シャンツ 『Erkennen und Gestalten (邦題経営経済学の課題と方法)(1988年)』
邦訳榊原研互(1990年)

B・コールドウェル 『実証主義を超えて』(1982年) 邦訳堀田一善、渡部直樹(1989)

ついでに、ポパー哲学の全体像を簡潔に紹介するとしたら、以下のようなまとめもある。(B・J・コートドウェル『実証主義を超えて』からの引用)

1. 知識の成長 認識論の中心問題は知識の成長の問題であり、それは科学的知識の成長を検討することによって実り豊かに研究され得る。ポパーは合理主義者の伝統に属さない哲学的アプローチの真価を認めない。また、哲学の問題はすべて言語の使い方、つまり言葉の意味の問題に還元されるという言語哲学者の見解を拒絶する。
2. 可謬主義 客観的真理は事実との対応というタルスキーの定式化の形で存在するが、いつ真理に到達したかを知るための基準は何ら持っていない。しかし基準は存在する。それは「もし幸運であれば」誤りを認めることが可能であろうというものである。この基準は、ポパーを懐疑主義から救済している。
3. 反帰納主義 普遍言明の真理あるいは高い確率が多く単称言明の真なることから推論され得るという帰納論理の定式化の試みを拒絶する。普遍理論が偽であることを示すことはできるが、真であることを証明することは決してできない。その結果、すべての知識は推測的である。
4. 批判的合理主義 知識が前進する二重のプロセスがある。大胆に推測し、それらの推測を意図的な反駁に遭遇させる。そこで批判的で厳しいテストが提案、遂行される。試行錯誤の過程であるが、それで誤りから学ぶことができる。合理的(かくして科学的)論説の究極規則は、すべての信念を批判的吟味に服させる。

11. ポパー・クーン論争を起点とする科学論の展開に関して

まずは、トーマス・クーンの主張について簡単にまとめて紹介する。

科学の発展はどのようにして進んだかを探究すること。それが狙いであった。その実際を探っていくと通説で強調されている事態とはかなり違うということに気づかされた。法則的知識や実験技術の積み重ねといった累積的発展でない。また理論は事実によって倒されるということでもない。理論を倒すのはまったくの新理論である。それは既存理論の修正や改正といったものではない。つまり、科学は断続的に転換する。それを科学革命といってよいのでないか。その革命の契機がパラダイムである。パラダイムによって新理論が形成される。

パラダイムは1つの完成された科学的領野を導く。その過程の科学的諸活動が「通常科学」である。クーンは通常科学の活動を「パズル解き」という。通常科学が成熟していく中で変則事例が発生し、それが多発するようになると、その科学に危機が招来し、新たな科学革命、新たなパラダイムへ、というサイクルを繰り返す。

この両者のパラダイムの「Incommensurability」(「通約不可能性」あるいは「共約不可能性」)を強調する。そこには共通の尺度は存在しないということである。

クーンはまた、「科学者共同体＝専門家集団」の自立性も強調した。パラダイム転換はその共約不可能性から理論対理論とはならず、この共同体の意思によるものになると強調する。さらに専門家集団として素人の参加を拒む閉鎖性も有していて、パラダイムの選択にはそれまでの通常科学の伝統との葛藤という主観性が伴うと指摘する。

クーンの科学史家としての立ち位置は科学理論に対する分析家ではなく、科学家や科学者集団の実際の活動に視座を置いて論究している。ポパーの視座(論理学者)とはまさに「共約不可能」であり、ある意味、理論問題としては真っ向対決の様相を呈することになったのではないかと思うところである。

ポパーとクーンの科学論に関連して着目した著書があったのでここに紹介したい。

まず1996年「ソーシャル・テキスト」誌に論文『境界を侵犯すること―量子重力の変形解釈学に向けて』が採用され掲載された。ところがこの論文はパロディで無意味な文言の羅列であることを著者のソーカル自ら暴露した。この雑誌の権威がぶち壊しになった。世に「ソーカル事件」という。

その物理学者アラン・ソーカルとジャン・ブリクモンの共著、『知の欺瞞』(1998年)が出版された。現代流行のポストモダン派の思想家・哲学者の非合理思想と科学用語を乱用しての意味の通らない文章の多産への痛烈な批判の書である。

その中の1章を「間奏」としてポストモダンではない科学哲学者を取り上げている。ポパーについては、いくつかの正しい洞察を含んでいることに疑問がないがとしながら、いくつかの難点を上げている。例えば、①反証ならば否定的な解決でしかない。予測は肯定的に確証される。②反証は見かけ以上に込み入っている。③科学的な命題を1つずつ個別に反証していくことは不可能である、などである。反証可能性という方法論的概念と反証という実際との関係性について明瞭でないことを突いている。

他方、クーンに対してはパラダイム転換が非合理的な理由で起こったことはないとし、その歴史相対主義を批判する。この書のテーマからは離れている二人を論ずることに違和感を持ったが、ポストモダンの論者、論述の欺瞞性を測る尺度として、この書の意義は大きい。ぜひ多くの人に薦めたい。

さて、ポパー・クーン論争は、これを起点にその後も引き続き活発に展開されるようになった。もとより、諸科学の多彩で急テンポのダイナミックな発展がその背景にある。この論争を軸とした論書から若干ピックアップしておく。

村上陽一郎 『科学のダイナミックス』(1980年) 科学論の中でのポパー・クーンの位置づけをコンパクトに解説。

A・ブラニガン 『The social basis of scientific discoveries』(邦題「科学的発見の現象学」1984年)(邦訳村上陽一郎・大谷隆昶^{たかのぶ} 1981年)

A・F・チャルマーズ 『What is the thing called science』(邦題「科学論の展開」1982年)(翻訳高田紀代志、佐野正博、1983年) その改訂は3度に及ぶ。

H・ブラウン 『Perception, Theory and Commitment』(邦題「科学論序説」1977年)(邦訳野家啓一^{のゑ}・伊藤春樹、1985年)

L・ローダン 『Progress and its Problems Towards a theory of scientific growth』(邦題「科学は合理的に進歩する」1977年)(邦訳村上陽一郎・井山弘幸 1986年)

ポパー・クーン論争に触れていないが、ノーウッド・R・ハンソン(1924～1967、43才で没)の『Patterns of Discovery』(1958年)(邦訳村上陽一郎で『科学理論はいかにうまれるか』(1971年)後に文庫版『科学的発見のパターン』)は科学論の文献として令名高く必読といわれている。遺稿論集として『知覚と発見』がある。

また、ポパーの科学論を取り上げている著書を若干あげておきたい。

M・ヤンマー 『量子力学の哲学』1974年(邦訳 井上健 1984年)

量子論の解釈問題についてポパーの見解を取り上げる。ポパーは不確定性原理に反

対する。そして量子論研究に対する自らのテーゼを提唱した。

D・ブルア 『数学の社会学—知識と社会表象』1976年（邦訳佐々木力・古川安 1985年） 1つのケース・スタディとしてのポパー・クーン論争、その評価。

I・プリゴジン、I・スタンジェール 『混沌からの秩序』1984年(邦訳伏見康治・伏見譲・松枝秀明 1987年) ボルツマンの解釈についてポパーの異論など。

T・チルダース 『確率と哲学』2013年（邦訳宮部賢志・芦屋雄高 2020年）
ポパーの確率の確定性(別訳：傾向性：propensity)解釈について論じている。ポパーは、主観的確率論は科学理論でないとし、客観的確率論を提唱する。

K・ヒュブナー 『科学的理性批判』1978年（邦訳神野慧一郎・中才敏郎・熊谷陽一、1992年） ポパーの真理概念などを徹底批判する。クーンにはふれず。

中山茂編著 『パラダイム再考』(1984年) 「私は、クーンの『科学革命の構造』を邦訳して日本にパラダイム概念を導入した者として、この混乱した位相を整理する責任を多少なりとも感じている」として氏はこの本を用意した。15人の寄稿による論文集である。経済学、社会学、政治学への関連に関する論文がある。改めて読まねばと思っている。ポパーに対する批判的見解が散見される。

野家啓一 『科学の解釈学』(1993年) 科学の論理学でなく、解釈学へという視点。つまりクーンの立場から、科学の論理化でなく科学の物語化へと論ずる。

氏は講談社『現代思想の冒険者』シリーズで『クーン—パラダイム』(1998年)を著述しているが、これは単行本としては唯一といえる書である。

スティーヴ・フラー 『われらの時代のための哲学史 トーマス・クーン』(2000年、邦訳は 2009年) この書の邦訳は「冷戦保守思想としてのパラダイム論」というサブタイトルをつけた 684 頁の大著である。著者はクーンが戦後の代表的な保守思想家だったという天地をひっくり返すような主張をしているという(監訳者中島秀人氏の弁である)。クーンが着目しているのは革命的転換でなく、相対的に安定している時期のことだとしている。

日本人科学者・哲学者でポパーやクーンの科学論を具体的な個別科学との関連で取り上げ、本格的に論究している著書は、管見の範囲ではほとんど見出しえなかった。

その中で、地質学者^{みやしろ}都城秋穂(1920～2008)氏の著書『科学革命とは何か』(1998年、岩波書店)は着目に値する。氏は、地質学のダイナミックな変貌と現在的探究と課題提出のなかで、ポパーとクーンの意義について両論を軸に積極的に紹介されている。氏は、科

学方法論、科学思想においてクーンのパラダイム論とポパーの後継たるラカトシュの科学的研究プログラム論は矛盾・対立するものでなく相補的であると捉える。

地質学において 1960 年代のプレートテクトニクス論の出現は革命的事件であった。天動説から地動説への転換に匹敵する。大地が水平的に地球上を移動するという理論である。そして今では常識である。造山運動(山脈の形成)は上下運動(地向斜)から水平運動(プレート移動)と交代した。それは理論の交代である。決して実証主義的帰納論によるものではない。クーンのパラダイム論に適合するが、それだけでなく、ポパーの批判的合理主義とその検証理論にも適合する。それまで積み上げた地質調査データそれ自体、いわば知的財産としていつまでも残る。そのデータはプレートテクトニクス理論の検証材料として再成するのでないか。かつてティコ・ブラーエは膨大な惑星観測データを積み上げた。それは天動説を確証するためのものであった。ケプラーがそれを地動説のもとでの惑星運動の検証データとして活用した。もとよりその理論は帰納的ではない。それと重ね合わせることができる。

また、今回、改めてクーンの『科学革命の構造』を読み直し、テーマと直接関連しないが一つのフレーズにであったので、ピックアップしたい。

「科学者も人間であって、厳密な証明を突きつけられても自己の誤りを認めたがらない。……こういう事柄には、証明も誤りも問題になっていない。あるパラダイムから別のパラダイムへと説を変えることは改宗の問題であって、外から強制されるものでない。……それまでの通常科学の伝統に賭けてきた人たちが生涯をかけて抵抗するということは、……科学的基準の冒涇ということではなく、科学研究そのものの本質を示すものである。……パラダイムの変革は証明だけで正当づけられるものではない。……科学者の集団は何度も新しいパラダイムに改宗させられてきた経験がある。……すべての専門化が再び一つの今や全く異なったパラダイムの下に仕事を始めるまでの間、改宗を受け入れる人はごくわずかにとどまる」。

12. 形而上学にたいするポパーの見解

ポパーは形而上学、つまり哲学を科学的でないからと否定したり、無意味であるからと排撃したりはしない。では経験的反駁の対象とならない哲学理論が反駁不可能ならば、「真なる哲学理論」と「偽なる哲学理論」はいかにして区別できるのであろうか。大変なアポリアである。ポパーはこの点に切り込む。批判的合理主義的に追求する。

考察の前提として、理論を3つのタイプに区別する。①論理的数学的理論、②経験的

科学的理論、③哲学的あるいは形而上学的理論、である。これらの中での真なる理論と偽なる理論の区別を考える。

①、その理論をテストする。その証明かその反駁を考える。それを繰り返すことによって解決に達するか、難しすぎる問題として棚上げする。あるいは二つ以上の対抗する理論をテストし、吟味して、決着に至るまで試みる。

②は同じ手続きで理論のテストをおこなう。その批判的吟味は経験的議論を用いておこなわれる。反証可能性という基準に即して検証するとして述べてきたことである。

さて③についてはどうか。反証不可能な理論を合理的に評価する可能の追求である。哲学理論が世界に関する1つの孤立した主張に過ぎず、「取捨いずれかの態度をとれ」ということを含んで投げだされ、しかも他のいかなる関連も示唆しないならば、まさに論議の及ばないものとなる。

しかし理論の実際はそうではない。科学的であろうと哲学的であろうと問題を解くことを試みている限りにおいて合理的理論としての対象である。理論は与えられた問題状況との関連においてのみ、理解可能であり合理的である。

そこで理論を「ひと組の問題に対して提出された回答」と見なすならば、たとえ非経験的で反証不可能であっても、直ちに批判的論議にゆだねられる。つまり、それは問題を解いているか、問題をただ移しただけか、その解答は単純か、実り多いものか、もしかすると他の問題を解くために必要な他の哲学理論と矛盾するのではないか、等々。こうした問いによって反証不可能な理論でさえも批判的論議が可能になる。非合理主義に関しても批判的論議は可能であるという。

ポパーはそれを「形而上学的研究プログラム」として提唱している。つまりテスト可能でないとしても批判可能であるとする。つまり経験的反証の対象とならない理論への合理的評価を目指す。この批判的論議とは理論を一对の設定された問題とする。その理論はたとえ非経験的で反証不可能であっても、直ちに批判的論議にゆだねられる。その結果、つまり合理的な判断(結論)を見いだしうるとする。ポパーは哲学理論の5つの例でそれを具体的に試みた。

1. 決定論 未来は現在によって完全に決定されている、ゆえに未来は現在に含まれる。カント。

2. 観念論 世界はわたくしの夢である(世界は私の意識ない存在である)。バークリーやヒューム。

3. 非合理主義 われわれは自分自身を物自体として経験するところの非合理的・超合理的経験を持っている。したがって、物自体のある種の知識を持っている。ヒューム。

4. 主意主義 われわれは、みずからの意欲のうちで自分自身を意志として知る。物自体は意志である。ショーペンハウアー。

5. 虚無主義 われわれは、われわれの退屈さのうちで自分自身を虚無として知る。物自体は虚無性である。ショーペンハウアー。

したがって、これらの例は、それぞれに誤りであるとポパーは批判する。なぜなら、ポパーの立場は第 1 では非決定論者であり、第 2 では实在論者であり、第 3 では合理主義者である。それぞれ合理的に批判可能である。第 4 と第 5 に関して、無限の豊かさ と美しさをもった実在世界に関する完全な知識のようなものを持ちえないことは認めよう。しかし、世界は意志であるといった主意主義的定式化もわれわれを助けることはできない。そして自分自身(と、おそらく他の人々)を退屈させる虚無主義と実存主義に関して、ただかれらを憐れむだけである、とする。

1 3. 三世界論に対するポパー学派の受けとめの一形態

ポパーの三世界論はポパー学派にすんなりと受けとめられてはいない。当惑し、あるいは不評で、何かしらのアンビバレントに直面し、態度決定できない状況にある。ポパー哲学にとっては由々しき問題で等閑にはできない。そうした緊張性にもある。

その例を長めの引用であるがピックアップしたい。蔭山泰之氏の『批判的合理主義の思想』による。

「ポパーの三世界論とは、いったいどういう理論だろうか、この理論を唱えるまえまでのポパーは正真正銘の経験主義者であった。カントの影響を強く受けてはいたけれども、また形而上学の意義を認めていたけれども、その議論は基本的に経験主義の枠からはずれてはいなかった。……しかし、三世界論はこうした経験主義的なポパーの思想の枠組みからはずれてしまっているように見える。これは、いわゆる伝統的形而上学の枠組みに属する議論である。もちろんプラトンやヘーゲルなどの形而上学とはそのスタイルがまったく異なるが、それでも経験主義の枠組みでポパーを理解しようとしている者にとっては、ポパーの三世界論はたしかに戸惑いを覚えるはずである。……かつてホワイトヘッドのプロセス形而上学を、厳密な論証によるのではなくたんに説得力に頼っているだけだと批判したことがあるが、しかし晩年になるとそのみずから批判した説得力に訴えるようになる。それゆえ、三世界論も厳密な論証によって構成された理論ではない。……このように見てくると、ポパーを統一的に捉えようとすれば、三世界より以前とこれ以後では大きな断絶があると言わざるを得ない。しかし、この断絶を取りあげている解説や研究はあまりないようである。科学方法論者としてポパーを理解してきた者なら誰でも

も、三世界論に出くわして一度は当惑する……三世界論を唱えるまでのポパーの思想はオーストリア・イギリス的であったが、三世界以後のポパーはいわばドイツ的になったと言える。……だが、ポパーの三世界論の意義が解明されなければ、おそらく経験主義者に終わってしまうだろう。『客観的知識』以降の著作や論文や講演のほとんどに三世界論が登場してくるので、かなりの比重を占める。だから、三世界論を解明することがポパー思想の十全な理解の鍵になろう」。この著者は、三世界はメタファーであり、規範理論であるとして、自己の理解を展開しているが、ここでは触れない。

あるいはまた、世界3論という研究プログラムは十分でないとして、「世界4」論を提起する論者(橋本努氏)もいる。そこでは世界4とは、「共有された非言語的なもの」の領域(共通の感覚域のこと)であるとされるが、それは世界1に属するのではないかと報告者は浅慮ながらも考える。

1.4. 世界2の実在性に関して

世界2は心の世界である。意識および観念の世界である。世界1と世界3の実在性は具体的である。世界2はその実在性をどう追求可能であろうか。世界1と世界2は心身問題あるいは心脳問題そのものである。

なお、蛇足であるが、心身関係を略述すると、以下のとおりである。つまり、近世になってのデカルトの二元論、物心二元論からである。両者は独立している。結びつけるのは脳の中の松果腺が結びつけるとした。しかし現代は脳科学や認知科学のテーマとして最新科学の最前線にある。

二元論の諸説 ①相互作用説(interactionism)、心と身体が互いに相互作用を行う。②随伴現象説(epiphenomenalism)、心的現象は物的現象に随伴して生起する。③平行説(parallelism)、心と身体との間には平行関係があるのみ。その後、人間機械論、人間は物質機械とみなされ、心的現象は物的・機械的現象に還元される。

大脳生理学の発展によって、心の働き、現象は人間の脳神経の生理的機能の結果、随伴現象と主張されてきた。そのため心の内観性に着目して、大脳の変化を原因として内観内容を伴った意識現象(例え知覚)を結果とする因果関係を現代の学的枠組みの中で設定することは困難になった。これが知覚の因果説批判である。心的現象の物質的還元を拒否する。

一方、心脳同一説、同一のものの両面、同一のものの2つの現れなどがある。

中立的一元論(neutral monism)は観念論でも唯物論でもなく、仮想実体一元論は実体論としての心身問題を脱構築して、物や心の実体でなく非実在の仮想的一元による同一

説を求めると主張する。

心脳同一説は感覚、知覚、思考、喜怒哀楽、意志などの心的事象は脳に生じる物理的過程にほかならず、しかもそのことは科学的に証明されとする。その根拠は、①物理的な原子・分子・電磁場などを究極の実在としたこと。②心的事象を刺激と反応の関数としてとらえる行動主義から出発する。③20 世紀中葉の脳生理学の興隆を背景として心的事象と同一視すべき身体的過程を脳過程に局限した。④論理実証主義、分析哲学の伝統に立ち、心的現象と脳関係をつとめて言語同士の関係としてとらえた。悲しみなどの心的現象は外的刺激と反応の中間に生じる脳の過程である。ただし、①きわめて異質なそれらが同一であること、②脳過程のみが実在し、悲しみという心的事象は実在しないこと。この 2 点を科学的観察や実験で証明することはできない。

また、脳過程そのものでなく脳過程の機能(ソフトウェア)と同一視する説がある。それが機能主義である。この場合、世界 2 とは最も遠い。AI に近い。

世界 2 の実在性はポパーによれば、自我の独立性の主張であり、相互作用説であり、世界 1 との関係では明確な二元論である。この見解は以下に述べる最近の諸理論とどう結びつくのであろうか、ポペリアンなど識者の見解を尋ねたいところである。

①ミーム(meme)論。遺伝学者リチャード・ドーキンス(『利己的な遺伝子=The selfish Gene』の著者)などの主張、自己複製子、あるいは模倣子、模伝子、意伝子などを意味する。文化、言語、ファッションなどの情報を伝える。形質遺伝子(DNA)に対する文化遺伝子であり、自己増殖する何らかの実在とされる。遺伝子とミームは強化しあったり、対立しあったりの相互作用関係を持つ。もとよりミーム=心・意識とは論じていない。なお定着していないが、関連したマインド・ウィルス(mind virus)という用語もある。ミーム論とは直接的関係はない。

なおドーキンスは「科学の進歩と、自然淘汰による遺伝的進化の類似性に関しては、特にカール・ポパー卿が解明を加えている」と述べて、その探求の方向をもっと推し進めたいというのが私のねらいである、としている。

②クオリア(qualia)論。脳科学者茂木健一郎(『脳とクオリア』など)氏などの主張・提唱である。クオリアとは質感、感覚質などともいわれる。あるいは感覚的クオリア、志向的クオリアなどの区分もある。茂木氏によれば、《クオリアの内観的定義=クオリアは私たちの感覚の持つ、シンボルでは表すことのできない、ある原始的な質感である》と《クオリアの情報処理の側面からの定義=クオリアは脳の中で行われている情報処理の本質的な特性を表す概念である》としている。ただクオリアは心と脳を結びつけるも

のということも強調されている。心は別にある。

③ダークマター(dark matter)論。野口幹夫氏の説である。シュレーディンガーの説、および理論物理学者リサ・ランドールの考察を踏まえられておられる。氏は「私を構成する二重構造というのは身体を下部構造とすると、精神である上部構造からなっている。上部構造こそダークマターからできている。人間精神はこのダークマターからなる上部構造がもっぱら受け持っている。だから精神は見えないし、物理の世界では扱えない」、「精神＝魂は重力波のみをだすダークマターという未発見粒子がダークエネルギーによってきわめて高度に組織化された記憶体として存在する。それは五次元の世界に直接つながっている。だからこそ、人間の精神は生きている間ですら、時間・空間を自由に動き、想像を働かすことができる」と述べられておられる。

15. ポパーの量子論問題への13のテーゼ

ポパーは量子力学のコペンハーゲン解釈に異議申し立てをしている。つまり、ボーアやハイゼンベルクの解釈、「客観的実在は蒸発した」、量子力学は粒子ではなく、むしろ粒子についてのわれわれの知識、観察、あるいは意識を記述しているのだ、という主張への反対意見である。ポパーの見解は「観測者」なき量子力学、それは古典統計力学と同様、客観的な理論であるという主張である。「このガラクタを読む物理学者はせいぜい第6テーゼぐらいまでだろうが」、といって13のテーゼを要約の形で論じている。報告者は勿論、量子力学を理解する力などもっていない。ポパーはこのような哲学者でもあるということを紹介したくて、無謀にも、さらなるその要約を用意した。ほとんど間違った要約かも知れない。関心を持たれる人は「科学的発見のポストスクリプトより」の第3巻『量子論と物理学の分裂』で、直にあたってもらいたい。

テーゼ1 量子論の問題は本質的に統計的な問題である。

テーゼ2 統計的な問題は本来的に統計的な答えを要求する。だから量子力学は統計的な理論のはずである。

テーゼ3 量子論への観測者や主観の侵入を招いてしまったのは、量子論の確率的な性格を問題の持つ統計的な性格によってではなく、われわれの知識の欠如によって説明しなければならないと考えるこの誤った信念である。

テーゼ4 その結果、わたくしが両氏(ボーアとハイゼンベルク)の大きな泥沼とよぶものに直面している。泥沼とは「粒子と波動の二重性」つまり「wavicle」についての語りである。確率分布関数 P の関数をみるべき。

テーゼ5 ハイゼンベルクの公式(略)は測定精度の上限を示すものではなく、統計的

分散関係である。

テーゼ 6 それは粒子の集団にかかわる理論であり、当然ながら位置と運動量を持っている。位置と分散については実験結果の統計的な均一さに限界があるといっているに過ぎない。

テーゼ 7 量子論の予測は統計的である。その分散がハイゼンベルクの公式によってあたえられている。

テーゼ 8 量子力学の数学体系の解釈は確率計算の解釈と密接に関連している。確率の傾向性解釈に基づくべきであることを提案する。

テーゼ 9 「波束の収縮」は量子論に特有の効果ではない。それは確率論一般の帰結である。

テーゼ 10 傾向性解釈は粒子とその統計のあいだの関係はなにかという問題を解決し、したがって、粒子と波の関係という問題を解決する。

テーゼ 11 たとえ量子と確率場がともに実在だとしても、それらの間の「二重性」について語るのは誤解を招く。粒子は実験にとって重要な対象である。確率場は傾向性の場であり、それ自体は指定された条件での実験環境における第一に重要な属性である。

テーゼ 12 粒子と波の二重性という誤った考えが生じたのは一部には、粒子の構造についての波動理論を与えようと、ド・ブロイとシュレーディンガーが望んだことによる。ボルンの統計的解釈がテストにパスして以降は、抱き続けるべきでなかった。

テーゼ 13 古典物理学も量子物理学も、ともに非決定論的である。量子力学の特異性は波の振幅の重ね合わせの原理(一種の確率的依存)にある。確率における傾向性が物理的に実在することを支持する論点である。

ポパーはマックス・ボルン、あるフート・ランデ、ヒュー・エヴェレット 3 世などの理論に着目している。ポパーの見解がどのように評価、批判されているか、識者の教示をお願いしたい。

1 6. 知識人の(職業)倫理についてのポパーのメッセージ

『よりよき世界を』の「寛容と知的責任」1982 年から、小河原誠氏に倣って結語に。

古い倫理は、真理、合理性、知的責任の理念であった。それは個人的な知および確実な知の理念であった。従って権威の理念であった。真理と確実性を所有し、そして可能とあれば論理的証明によって真理を確実にすること。ならば権威たれ、この領域における一切を知れ、であり、誤りは許されない。しかし、新しい倫理(原則)を提案したい。

1) 我々の客観的な推測知は、いつでもひとりの人間が習得できるところをはるかに超

えていて、それゆえいかなる権威も存在しない。専門領域の内部においても。

2) すべての誤りを避けることは不可能である。誤りはあらゆる科学者によってたえず犯されている。誤りを避けることが義務であるという理念は修正されねばならない。

3) もちろん、可能な限り誤りを避けることは依然として我々の課題である。そのためには誤りを避けることがいかに難しいかを明確に自覚する必要がある。直感是我々を誤った方向に導くこともある。

4) もっともよく確証された理論のうちにさえ誤りがひそんでいるかもしれない。そうした誤りを探究することが科学者の特殊な課題となる。それらのうちにも誤りがあるという観察は重要な発見である。

5) 我々は誤りに対する態度を変更しなければならない。つまり誤りをもみ消し、隠蔽し、できるだけ速やかに忘却させるといったものであつてはならない。

6) 学ぶために、また可能なかぎり誤りを避けるため、まさに自らの誤りから学ばねばならない。誤りをもみ消すことは最大の知的犯罪である。

7) 我々は誤りを見出したなら、心に刻まねばならない。誤りの根本に達するために、あらゆる角度から分析しなければならない。

8) それゆえ、自己批判的な態度と誠実さが義務となる。

9) 他者が我々の誤りを気づかせてくれた時には、それを受け入れること。他者の誤りを明らかにするとき、我々自身が、彼らが犯したのと同じような誤りを犯したことがあることを思いだすべきである。勿論、わたくしは我々の誤りは通常許されるといっているのではない。我々は気をゆるめてはならないということである。

10) 誤りを発見し、修正するために、我々は他の人間を必要とする。とりわけ異なった環境のもとで異なった理念のもとで育った他の人間を必要とすることが自覚されねばならない。

11) 我々は自己批判が最良の批判であること、しかし他者による批判が必要なことを学ばねばならない。それは自己批判と同じくらい良いものである。

12) 合理的な批判は、いつでも特定されたものでなければならない。それは、なぜ特定の言明、特定の仮説が偽と思われるのか、あるいは特定の論証が妥当でないのかについての特定された理由を述べるものでなければならない。それは客観的真理に接近するという理念によって導かれていなければならない。このような意味において、合理的な批判は非個人的なものでなければならない。

以上